



蘇る一瞬 みとよ写真帳 page 44

このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。

※文書館では、まちの風景や催事などの古い写真を収集しています。原本はお返し
しますので、情報の提供をお願いします。【文書館 ☎63・1010】



懐かしの1枚

詫間海軍航空隊建設前の香田の海岸
昭和16(1941)年以前 詫間町

詫間海軍航空隊建設前の香田には、海岸沿いに多くの家々が存在し、田畑が広がっていた。海岸には、美しい松林も存在した。しかし詫間海軍航空隊の建設にあたり、香田・和田内・新浜の住民が移転を迫られた。働き手となる者たちが軍に徴用されていたので、集落に残る老人・女性や子どもの手で移転をおこなわなければならなかったと言う。

「思い出のページ」

「昔の香田は、稲穂がたわわに実る肥沃な水田と、100戸余りの隣合った家々が続く、平和でもおだやかな地域でした」と話すのは詫間町の陶山恒雄さん(90)。「この写真は香田のシンボル『天神山』から撮った風景ですね。左奥の山は塩生山。昔は、香田から山のおもとまで続く長く白い砂浜と、青い松林があったんですよ。月夜に近所の人たちと、この浜で盆踊りもしましたね」と当時を振り返ります。

「昭和16年4月、当時数えで17歳だった私は、小学校高等科を卒業後、官立栗島商船学校に入學しました。そして、この年に太平洋戦争に突入しました。

戦争の少し前、丸亀連隊から軍人が来て、詫間海軍航空隊建設のための立ち退き命令が出ました。私と両親は、国のためにと6kmほど離れた現在の自宅がある中郷集落に移ることになりました。移転期間はわずか一カ月。若者は軍人・軍属として徴用されていたので、残る年寄り、女性や子どもの手で移転作業を行わなければなりません。自動車はなく、未舗装の道を大八車で何往復もするのは本当に大変でした。我が家では幸いなことに父が残っていたので、父と母が二人で作業して、学校の休日に私が重い荷物を運びました。

移転期間が迫ってくると、何千人もの土木作業員が航空隊建設のために香田になだれ込んできて、見る見るうちにトロッコの線路や仮設道路が敷設されていきました。あの美しかった青い松林は切り倒され、砂浜は滑走路になりました。こうして、わずか一、二カ月のうちに香田地区は姿を消しました。

写真の左にある松林、ここから戦地へと飛び立った若者たちはみな戦死しました。とても優秀な人たちが」と、陶山さんは蘇るつらい記憶に声をつまらせ、その目には静かに涙が浮かんでいました。

編集 後記



今月の特集で「環境都市日本一」を呼びかける若者3人は、四国学院大学香川西高校サッカー部の3年生。同校は、サッカーの強豪として全国で一目置かれる存在ですが、その一方で、地域行事にも積極的に参加しています。

「たかせ夏まつり」では、真っ黒に日焼けしたサッカー部員たちが、サッカースクールの子どもたちとともに、笑顔いっぱい弾けるダンスを披露しました。爽やかな好青年たちにエールを！「目指せサッカー日本一!!」